

(回答 2 : 渡邊雅弘)

本邦における西洋古典語(ギリシア語ラテン語)の字引と文法書の嚆矢について

過日、ライデン大學名譽教授・村岡崇光先生から古典學會宛に、本邦における古典語(ギリシア語ラテン語)の字引と文法書の嚆矢について、問ひ合はせがあつたと、中務哲郎先生から急なお知らせを戴いた。わけても、傲慢に「世界史と普遍文明」を背負つて東漸したイエズス會宣教師の南蠻學や、紅毛學の江戸中期以降および明治・大正・昭和時代にわたる文獻史について、村岡先生の問ひにはいかにも虚を衝かれた感があつた。同時に、邦人外人の人名索引のみ附載し記事索引がないため、木偶の坊と化していた拙編著『日本西洋古典學文獻史』(全 4 卷。第 4 卷増補訂正中)が実際に使へるか否かの試金石になるやうにも思はれた。拙編著が採録記事の限られた摘記であり、況や調査の不行き届きや、誤記誤植の瑕疵や缺陷をも免れない以上、網羅的な文獻遡及の検討は思ふにまかせない。疑義のない結論は出にくいのである。ともあれ、本書の記事と、多少の文獻渉獵によって現在確認できることを、管見の限りで、試みに以下のやうに回答したい。初出が判断しにくいので、次出等をも含めて、多少の時間幅を持たせた。

本邦最古の古典語の文法書と字引は、宮永孝氏、渡邊頭彦氏の御説のとほり、南蠻學上の次の三書に指を屈するやうに思はれる。

- ・文祿 3(1594)天草學林版アレヴァレス『拉丁語文典』(Emmanuelis Alvarie e Societate Iesu, De Institutione Grammatica, libri tres)
- ・文祿 3(1594)天草學林版アレヴァレス『羅日葡語規則動詞變化』(Manoel Alvarie, Conjugação dos veros regulares em Latin, Japonez e Portuguez)
- ・文祿 4(1595)天草學林版『羅葡日對譯辭書』(Dictionarium/Latino Lusitanicum ac/Iaponicum・・Iesu anno Domini MDXCV)
なほ、慶長 15(1610)長崎學林版エマニユエル・バレット編『聖教聖華』(Emanuel Barreto, Flosculi ex veteris, ac novi Testamenti, S. Doctorum et insignium philosophorum Floribus selecti)

このラテン語版古典名家詞華集は、コレジオの神學生教育に格好の教材だつたであらう。

一方、この『羅葡日對譯辭書』には後年、次の二度の復刻がある。布教や神學生教育で重寶されたか。

- ・寛永 9(1632)コリヤード『羅西日辭書』(Dictionarium siue thesauri linguae Iaponica compendium)[1632 年、ローマ刊]
- ・明治 3(1870)B.T.Petitjean『Lexicon Latino-Iaponicum』(文祿 4 年切支丹版・羅和辭典[葡語の部を削除]羅和辭典刊行會)

プチジャンは明治初期、隠れキリシタンを発見したカトリック神父。

かうした前提に立ち、切支丹時代以來の文獻史を追ふと、興味深い傾向が浮かび上がる。本邦における古典語修得の歴史には、時間軸に沿つて三系譜あるらしいのである。(1)基督教布教の南蠻學を前史とする系譜、(2)江戸中期以降、主として紅毛學の醫學・藥學・解剖學・植物學等の技術實學の系譜、(3)江戸中期紅毛學を前史とする、明治 26(1893)年に來朝後、大正 3(1914)より 21 年間帝大に在職したお雇ひ外國人ケーベル[希臘語]、同時期のエック教師[羅匈語]以來のアカ

デミズム古典語學、象牙の塔の學の系譜、である。田中秀央先生や二、三の例外を前史として、古典希羅語の本格的な研究と教授はやはり帝大でのケーベル、エックの薫陶以降に屬すと言へよう。一方、ギリシア語研究に先行する近代日本のラテン語研究は、ケーベル、エック以前では、1887年にザメンホフの提唱した「危険な言語」、あるいは「異端の言語」エスペラントを第二外國語として「世界語」とする普及運動への對抗があつたのではないかと推測する。ユダヤ人眼科醫ザメンホフの放棄した難解なラテン語への執着が奏功して、本邦初出の羅甸文法書が上梓されたやうに思はれる。

希羅語の文法書は當然、明治大正の時代とともに増加する。江戸中期以降、語學プロパーのそれは出来不出来はあれ、時代を追ふにつれ確實にその数が増加する。各専門分野毎の特殊な傾向のある古典語文法書の刊行はそれを凌駕するとはいえ、醫學・藥學等、技術自然科学系を除けば、さして讀者の需要があつたとも思へない。その兩者の範疇の中での各初出は判断しにくい。

文法書は名詞動詞の變化表如何を一つとつても、内容の多寡詳細によつて、初出の扱ひも異なる。ただ事情は變則的で、單純でない。特に醫學・藥學・解剖學・舎密・各國文學・聖書研究等の學生のためのラテン語文法書の刊行が先行し、どちらかと言へば、古典ギリシア語の文法書の上梓は出遅れたやうである。

他方、字引も多種多様であり、何をそれとするかによつて、挙げうる文獻と初出も異なる。江戸期には、長崎通詞や洋學名家諸家が、洋人物傳・史學・各國文學・思想・博物・本草・金屬・鑛學・天文・醫學・藥學・解剖學・化學等々、特化した分野にわたつて諸書を多々編んでをり、纏まつた各語對照語彙集を別にしても、書中に關聯する希羅の古典語の散見される例の方が多い。高價な洋書の和譯、翻譯語を創造する先達の執念と辛苦は想像を絶する。松浦家文書に所載の、時代も著者もばらばらの數種の舶來羅甸語字引は垂涎的だつたであらう。それでも、漢語の教養を存分に活かしつつ、収録語數も譯語も未熟で不足する蘭和・獨・英・佛の字引は江戸期後半と明治期にその刊本數が次第に増加する。しかし、「舟を編む」地を這うやうな、纏まつた古典語學上の字引の刊行は、洋書解讀の基礎たるにも拘はらず、ずつと遅れて後年に至るまで意外にその例を見ない。羅甸語辭典は大正期以降わづかながら數種あつても、古典ギリシア語辭典は、時代を下つてもなかなか見出せない。隔靴搔痒の感をかちつつも、各種の洋文法書と同様に、蘭英獨佛の洋辭書に據る以外になかつたのであらう。以下の字引の諸文獻に見られるやうに、近代日本では羅甸語研究の方が先行して優勢であつて、古典希臘語研究は遅れをとつた。高津春繁「ギリシア語の辭典」図書 68(1955)(未見)がある。

私淑した、上代日本文學の故小島憲之先生がかつて、文獻學は「字引がなければ始まらないが、最後は字引は信用しない」と仰つたことがある。テキストの全體と細部の文脈を整合的に熟考し原典一語の讀みを確定せよ、といふ趣旨であつた。どんな字引も盲信できるほど完璧ではなく、時代の制約や間違ひもあつて、あくまでも一つの解釋を出ないといふのが、先生の確信であつた。従つて、文法書以上に、字引は増補改正の要と同時に、數多あるほうが望ましい。特に英語にも卓越し、「學」の一字を好まれた、頭が字引だつたやうな、この一代の碩學と呼ばれた師匠の言葉を忘れないやうにしたい。閑話休題。

(1) 基督教布教の系譜文獻(切支丹文獻以降のコイネー研究。)

- ・ 文法書

昭和 7(1932)黒崎幸吉『新約聖書ギリシャ語文典』(永遠の生命社)

昭和 7(1932)大儀見元一郎『新約聖書に関する希臘語文典』(啓文社)

昭和 8(1933)玉川直重『新約聖書ギリシャ語獨習』(一粒社)

- ・ 字引

昭和 15(1940)大儀見元一郎『新約聖書ギリシャ邦語辭典』(教文館)

古典ギリシア語辭典に先立つ、本邦初出のギリシア語辭典であらうか。

昭和 31(1956)今岡稔他編『新約聖書ギリシア語辭典』(今岡稔)

昭和 39(1964)織田昭編『新約聖書ギリシア語小辭典』(大阪聖書学院)

(2)江戸中期以降の技術係實學専門の系譜文獻

- ・ 文法書

明治 31(1898)高橋金一郎『らてんの曲ゲ大意』(渡邊宗三郎[泰山舎])

特に醫學生のためのラテン語文法書。

昭和 4(1929)緒方富雄『語源ギリシア語法：醫學術語の語源の理解と製作に必要なギリシア語法の知識』(南山堂)

昭和 5(1930)葛西勝藏『醫語ヨリ見タル希臘語』(克誠堂書店)

昭和 5(1930)市河三喜『英學生のためのラテン・ギリシャ語初歩』(研究社)

昭和 6(1931)朝比奈泰彦・清水藤太郎『植物藥物學名範典：科學ラテン・ギリシャ語法』(春陽堂)

- ・ 字引

[天保期?]『ラチ[ヂ]ン語』(京都大學文學部圖書館藏)

舎密、藥物學に關聯する語彙集らしい。著者、出版者、發行年不明。

[出版年不明]松本良順『解口[剖?]羅甸加留多---骨部』

[出版年、出版者不明]會槃編『西洋草木韻箋』(上下卷、上卷は羅蘭日語彙集)

[著者、出版年、出版者不明]『藥物名彙』(ラテン語字引)

文化 14(1817)大槻磐水譯定/大槻主幹・山村才助補校/吉川良祐・長谷川宗僊筆錄

蘭畹摘芳』(3 卷 1 冊、羅甸名附記。河内屋太助)

文政 5(1822)宇田川榛齋譯註・宇田川榕菴校補『遠西醫方名物考』(須原屋伊八、羅蘭對照)

文政 7(1824)宇田川榕庵『羅甸語解[解]』(自筆本)

本草、舎密に關する簡単なラテン語彙集。手控へ用か。

天保 5(1834)宇田川榛齋校閱(坪井塾生篇)『羅蘭漢日藥物名彙』(須原屋伊八)

天保 8(1837)横井琰『藥名早引』(2 卷、羅甸語。素道館)

明治 5(1872)[海軍大軍醫]奥山虎章編『醫語類聚』(名山閣)

「ドニクリソン著『メデイカルシユクリナート』ニ回リ醫學學術語ノ羅甸・希臘ニ基キ書ヲ拔萃ス」とある。

明治 5(1872)田中芳男・小野職懿・久保弘道『植學譯筌[羅英和]』(文部省)

明治 10(1875)[大軍醫?]菅野虎太(大洲)編譯『羅甸七科字典=Lateinisch-Japanisches

Vocabulary, Medicin und Naturwissenschaften : 解剖式圖解ヲ附録トスル』(全一冊小本。英蘭社) 序文「驚撫利爾 [ガブリエル] 氏の羅甸字林及び巴依西 [ハイゼ] 氏の佛國字林より抜粹。先生記憶による羅甸語數千を加へて記述」。醫學・解剖學用の字引。

明治 14(1881)江馬春瀨『洋和藥名字類』(丸屋善七)

明治 19(1885)伊地知英太郎・新宮涼園纂輯『袖珍醫學字彙』(伊藤誠之堂)

明治 21(1887)中村信三郎・青木武壽篇『羅獨及漢原譯對照病藥兩名集』(新潟・井筒駒吉)

これ以降、明治 41(1908)島田耕一篇『羅甸語處方文例(全)附・簡約羅甸文法』(大阪同濟號書院)に至るまで、「羅獨和譯」、「和羅獨英」、「獨羅英和」、「羅獨英和 等の表題を附された醫學、藥學の字典、字彙、字林、辭典類が續出する。なほ、次は珍しい例である。

大正 15(1926)朝比奈泰彦・清水藤太郎『醫藥處方語：羅和和羅辭典(羅典語入門及處方文例)』(南江堂書店)

(3)アカデミズム語學の系譜文獻

・文法書(ラテン語)

天保 6(1835)辻蘭室『蘭語八箋』(1 冊、羅甸語ギリシャ語)

町人・辻蘭室は語學の天才と呼ばれた。古典文法の説明があるかどうか。未見。

[文政期?不明]宇田川榕庵『厄利齊亞字音考』(自筆本)

ギリシア文字 24 音とオランダ文字 26 音の對照表。

明治 25(1892) [大軍醫?] 鈴木龍六『羅甸文典講義』(丸善)

邦人による本邦羅甸文法書の嚆矢と思はれる。お雇外國人の一人ラファエル・フォン・ケーベル[希臘語]は明治 26(1893)年來朝後、大正 3(1914)年以降、21 年にわたりエック教師[羅甸語]とともに帝大で教へた。著者・鈴木龍六はケーベル、エック來朝以前に本書を上梓してゐる。兩者との關係をも含めて、鈴木の人物の詳細は不明。序文に、「未通羅甸文、未曾泰西之主腦者也」、「羅化野蠻」とある。なほ、鈴木は同年、次のやうな論文を寄稿してゐる。當時、正統派言語學者はエスペラントを嫌つて、むしろ難解な羅甸語を擁護した。

鈴木龍六「宜く羅甸語を用ひて世界語と爲す可きの議」東京經濟雜誌 620(明治 25)

鈴木龍六「羅甸語の性質及其世界語たるべきの資格」東京經濟雜誌 623(明治 25)

赤石捨四郎「エスペラント語を排す---世界共通語として羅甸語の採用を勸む」[カトリック雜誌]聲 571(大正 12)

明治 22(1889)ワンデル・ヘイデン著/佐々木隼人編譯『和譯・世界語辭林』(松下包次郎)[世界語とはエスペラント]、上梓。明治 30(1906)年前後、著名な文化人、文人、言語學者の多數が賛同した日本エスペラント協會結成。露語に堪能な二葉亭長谷川辰之助がザメンホフ著の翻譯、「世界語」讀本、文法書、會話集、語彙集を刊行したことは、よく知られてゐる。以下はラテン語文法書の次出。

明治 36(1903)水野繁太郎『教科自習用羅甸文法階梯』(南江堂)

エスペラントに對する著者の立場は不明。

大正 3(1914) 田中秀央『初等羅甸文法』(田中秀央)

大正 4(1915)田中秀央『羅甸文法』(丸善)

大正 14(1925)前田越嶺『羅甸語初歩獨習』(訂正再販、尚文堂)

同年刊の字引、前田越嶺『羅甸語彙』(尚文堂)と抱き合はせて刊行の文法書。前田はもと
もと佛文學研究者だったやうである。

昭和 50(1975)国原吉之助『中世ラテン語入門』(南江堂)

中世ラテン語辞典は本邦ではいまだ編まれてゐないやうに思はれる。

・文法書(ギリシア語)

大正 10(1921)Hidenaka Tanaka(田中秀央),*Recta latini graecique sermonis Pronuntiatio*
(Kyoto Teikokudaigaku Bungakubu)

昭和 2(1927)田中秀央著/布川角左衛門編『希臘語文典』(岩波書店)

ケーベルによる教授以前の、田中先生のギリシア語研究の背景はわからない。

同二著のいずれを古典希臘語文法書の初出と見るべきか。次出は以下に。

昭和 8(1933)成瀬恒太郎『ギリシア語の輪郭』(語學文庫 2、尚文堂)

昭和 8(1933)成瀬恒太郎『ギリシア語文法』(尚文堂)

昭和 9(1934)水野清太郎『希臘語初歩』(英語英文學刊行會)

・字引

文化 7(1810)藤林晋山『譯鍵』(「太西葯名」之部、ラテン語。)

文政 2(1819)田中貞純・大野醇亭増補『蘭語呼聚』

和語並羅甸語集、蘭語羅甸語對譯。未見。本邦江戸期初出の字引か。

安政 3(1856)村上英俊(義茂)『五方通語』(3 冊、須原屋伊八他)

英佛蘭羅日の五ヶ國語對照字書。

安政 4(1857)廣瀬憲寛編『増補改正譯鍵』(秋田屋太右衛門他)

大正 14(1925)前田越嶺(長太)編『羅甸語彙』(尚文堂)

本邦近代初出のラテン語字引ではなからうか。直近の大正 13[1924]貝迪榮『練丁[ラテン]
中華辭典』(2 版、上海)は参照されたかどうか。

昭和元(1926)田中秀央『羅和小辭典』(岩波書店)

大正 4[1915]田中秀央『羅甸文法』の補遺版。

昭和 8(1933)河原吉次郎編『羅和辭典』(大阪文翫堂)

昭和 9(1934)サルバトル・カンドウ編『羅和辭典(Lexicon Latino-Japonicum)』(公教神學校)

昭和 12(1937)田中秀央・落合太郎編『ギリシア・ラテン引用語辭典』(岩波書店)

昭和 20(1945)近藤書店翻刻『羅和辭典』(レイス著、1915 年オックスフォード版)

昭和 27(1952)田中秀央編『羅和辭典』(研究社辭書部)

平成元(1989)古川晴風編『ギリシャ語辭典』(大学書林)

コイナー以外の古典ギリシア語の字引は、この古川晴風編著が本邦初出と思はれる。

平成 7(2005)国原吉之助著『古典ラテン語辭典』(大学書林)